

40回を迎える「観察会」

京大植物園 7日、苔テーマに



京大植物園の魅力を学内外に伝えてきた観察会。6月はキノコを探した（京都市左京区・京都大北部構内）

京都大理学研究科付属植物園（京都市左京区北白川追分町）で研究者や学生が開いている月例の観察会が、七日で四十回目を迎える。毎回、三十人から五十人の教職員や市民が参加するなど関心は高く、主催する「京大植物園を考える会」は、教育研究の伝統を引き継ぎ植物園のさらなる有効利用を」と訴える。

植物園は一九二三年に設立。ただ珍しい植物を集める栽培園ではなく、疏水を引き込むなどの工夫で、さまざまな生き物が生息する生態植物園として教育研究に貢献してきた。一部の樹木が伐採されたことを契機に、二〇〇三年、学内外の有志が「考える会」を結成。植物園の生き物たちを知ってもらうと、植物や鳥、昆虫など毎月テーマを設定して観察会を続けている。

六月十五日は、関西菌類談話会会員の小寺祐三さんの案内で園内のキノコを探索。一晩で液体

に変わるヒトヨタケ科のユキヒラダケや、フウの実から生えるクロサイワイダケ科のキノコなど、生態系に欠かせない存在のキノコについて学んだ。

考える会は五月には、植物園の今後の在り方について尾池和夫京大総長と面会して、世界遺産の上賀茂神社や下鴨神社と結ぶ「グリーンベルト」構想などで意見交換した。尾池総長は六月の観察会にも参加した。会では今後、研究者と学生、市民に開かれた植物園としての活用と運営を、大

学関係者に求めていくとしている。

次回は七日午後零時十五分から、「植物園の苔観察—しゃがんでこそ見える世界もある」と題して開催する。農学部正門北の植物園前で当日受け付ける。無料。問い合わせは電子メール（Kyoto.oubs@hotmail.co.jp）で。